

# 吒枳尼天と『法華経』をめぐる儀礼の言説

## ——称名寺聖教の吒枳尼天資料を手がかりに——

有賀夏紀

### 論文要旨

本稿では、金沢称名寺に伝存する吒枳尼天関連資料を読み解き、中世の儀礼と、それを支える教理について考察する。『辰菩薩口伝』『辰菩薩口伝上口決』は、仏教の夜叉である吒枳尼天の秘説を集めた聖教である。ここでは即身に成仏するという密教的身体観を基調とし、八葉蓮華、宝塔、舍利、如意宝珠といったキーワードを用いて、天台教学の立場から『法華経』（法華円教）と密教との一致を説く。この教説は衆生の心臓を食用するという吒枳尼天によって媒介され、成就するものであった。

これと同様の教理が、おなじく称名寺聖教の『輪王灌頂口決』<sup>私</sup>に見出せる。本資料は即位灌頂の口決であるが、天皇の身体と、仏との一体化を目的とする即位灌頂は、衆生の身体を食して即身成仏させる吒枳尼天と結びつきやすかったと考えられる。吒枳尼天と『法華経』をめぐる言説は、円密一致の教理とともに、中世の儀礼の一端を支えていたのである。

**キーワード**【吒枳尼天、『法華経』、称名寺聖教、円密一致、即位灌頂】

### はじめに

吒<sup>だ</sup>枳<sup>き</sup>尼<sup>に</sup>法は、仏教の夜叉である吒枳尼天を本尊とする密教修法である。この法は現世利益を速やかに成就させる行法であるとともに、天皇の即位法（即位灌頂）とも結びついて展開するなど、多彩な性質と信仰世界を擁するものであった。<sup>(1)</sup>

中世の吒枳尼法に関する資料は、金沢称名寺に伝存する「称名寺聖教」中にまとまって見出すことができる。早く榎田良洪氏によってその存在が指摘され、近年、西岡芳文氏によって体系的に翻刻と紹介がなされた。<sup>(2)</sup>これらの資料は「輪王灌頂」と称する即位灌頂の次第や口決、作法等を記すものとして注目されたが、その内容は十分に読み解かれたとはいえない。

本稿では称名寺聖教中の吒枳尼天関連資料を用いて、吒枳尼法を

支える教理がどのように形成され、どう機能したのかを考察する。とくに十四世紀初めに書写された『辰菩薩口伝』『辰菩薩口伝上口決』(以下、『上口決』)という二点の資料を中心に、吒枳尼天と『法華経』をめぐる言説群を分析し、儀礼との相関性について論じたい。

## 一、吒枳尼天の口決と円密の一致

筆者は以前、『辰菩薩口伝』と『上口決』が、天台教学の立場から吒枳尼天を媒介にして『法華経』(法華円教)と密教を融合させる「円密一致」を説く内容であること、そしてそれが中世日本天台の仮託書や、日本撰述經典の世界と近接するものであることを指摘した<sup>(3)</sup>。まずは、その内容を簡単に振り返りながら論を進めていく。

『辰菩薩口伝』と『上口決』は、吒枳尼天の秘説を集めた一結の聖教で、識語によれば正和三年(一二二四)に秀範<sup>(4)</sup>が書写したものであるという。両書は智証大師(円珍)や安然といった天台の先徳による「口決」(口で伝えられる秘密)という体裁で、吒枳尼天の秘説を展開する。

たとえば『辰菩薩口伝』では、安然の口決として、吒枳尼天と『法華経』二十八品、胎藏界の九尊と印契、十羅刹女とを対応させ、それぞれを八葉に配する(図1参照<sup>(5)</sup>)。これによって『法華経』と密教とを一体化し、その中心に吒枳尼天を据えることで、円密和合



図 1

を体现する存在としての吒枳尼天を称揚している。

八葉に『法華経』を配釈する円密一致の曼荼羅<sup>(6)</sup>は、円珍に擬された『講演法華儀』や『法華曼荼羅諸品配釈』といった中世日本天台の仮託書にも認められる言説である。『辰菩薩口伝』はそこに吒枳尼天や十羅刹女という尊格を取り入れた点が大きな特徴といえよう<sup>(7)</sup>。また本書は、吒枳尼天と十羅刹女の関係を、次のようにも表現している。

尺迦如来於靈山二処三会<sup>(8)</sup>、顯<sup>(9)</sup>説<sup>(10)</sup>此事<sup>(11)</sup>。故云妙法蓮花経<sup>(12)</sup>。大日如来於<sup>(13)</sup>法界宮<sup>(14)</sup>中<sup>(15)</sup>、秘殞<sup>(16)</sup>是事<sup>(17)</sup>。故云蓮花胎藏<sup>(18)</sup>。尺迦所説妙法蓮花経<sup>(19)</sup>擁護<sup>(20)</sup>スル人<sup>(21)</sup>、名奪一切衆生精氣<sup>(22)</sup>。大日所説<sup>(23)</sup>三部<sup>(24)</sup>秘法<sup>(25)</sup>

守護<sup>スル</sup>人ヲ、名吒枳尼王等<sup>(8)</sup>。

釈迦如来は、二処三会で「顕<sup>ニ</sup>」吒枳尼天の秘説（「此事」）を説いた。それが『法華經』である。これに対して大日如来は真理を秘匿したので「蓮花胎藏」という。釈迦如来の教えである『法華經』を擁護する者は「奪一切衆生精氣」と名づけられ、大日如来の三部の秘法（『大日經』『金剛頂經』『蘇悉地經』）を守護する者は「吒枳尼王」と名づけられた。これに従えば、『法華經』守護の十羅刹女である奪一切衆生精氣は顕教の守護者、吒枳尼天は密教の守護者と理解されるが、前述のようにそもそも両者は一体であるため、ここでも顕と密の一体が説かれていることになるのである。

このように『辰菩薩口伝』『上口決』における吒枳尼天は、法華円教と密教との合一を司る「真言法花ノ惣体」（『上口決』）と称され、顕密を兼ね備えた尊格として、『法華經』をめぐる曼荼羅世界を統合する役割を担っていたのである。

## 二、八葉蓮華と智恵の舌

『法華經』と八葉の和合を媒介する吒枳尼天であるが、それは人間の「心」を食むという吒枳尼天の性質によって成し遂げられるものであった。『大日經疏』によると、吒枳尼天は六ヶ月前に人の死を知り、死者の「心」すなわち「人黄」（精氣・心臓）を食べると

いう。<sup>(9)</sup> この一見恐ろしい特質が、『辰菩薩口伝』における秘説の肝要となった。

『辰菩薩口伝』では智証大師の口決として、八葉と衆生の心臓を重ね合わせて説いている。

智証大師口決曰

夫一切衆生ノ身中、五藏ノ中ノ羅刹藏、云フ八分肉団<sup>ト</sup>。此肉団ヲ奪<sup>テ</sup>取<sup>ル</sup>食用<sup>スル</sup>羅刹女鬼、名奪一切精氣<sup>ト</sup>也。衆生ノ精氣ハ、有羅刹藏八分肉団ノ内。其八分肉団、即自性清淨覺悟ノ蓮花也。

衆生の身中にある「八分肉団」、つまり心臓を、吒枳尼天と団体とされた「奪一切精氣」という名前の羅刹女が奪って食用するという。衆生の精氣はこの八分肉団にあつて、それはまた自性清淨覺悟の蓮華（清淨な悟りの蓮華）であると、ここでは述べている。心臓と胎藏中台八葉院（八葉蓮華）との合一は、たとえば安然の『菩提心義抄』第一に「一切衆生胸間肉団其形八分。其色丹赤。是五藏中心藏也。真言行者觀此八分爲八葉蓮」とあるように、即身に成仏することを旨とする密教の基本的な概念であつた。<sup>(10)</sup>

『辰菩薩口伝』では、この記述に続けて八葉にそれぞれ「十如是」（相・性・体・力・作・因・縁・果・報・本末究竟）を配当<sup>(11)</sup>している。いわく、四仏四菩薩は「相」から「果」の八葉に座し、中央の「報台」には、大日如来が結跏趺坐する。はじめの相葉が「本」で

あり、最後の報台が「末」である。これらの九尊は中道実相と化すので「究竟」と呼ぶ、という。十如是は『法華經』の方便品で説かれる教義であり、これもまた円密一致をあらわすために用いられているといえよう。

八葉と十如是の配釈は、こちらも円珍に仮託された『法華經』両界和合義や『講演法華儀』に見出せるため、本書で具陳される「口決」は、中世日本天台の仮託書において、先徳の口決として享受されてきたものだとして推察できる。このほか、『法華經』を密教的に解釈した『蓮華三昧經』という日本撰述經典にも同様の説が認められることなどから、『辰菩薩口伝』は円密一致をめぐる中世の仮託書や、日本撰述經典との交錯のなかに成立したものと考えられる。

この円密が和合した「八葉蓮華」衆生の心臓は、吒枳尼天の「智恵ノ舌」によつて清められるものだった。『辰菩薩口伝』では、さらに以下のように述べている。

大師口決云

吒枳尼ノ印相ト云、右拳押腰ヲ、仰テ左掌ヲ、以舌ヲ舐ル血ヲ勢ニ作也。左理也。理者九法界ノ衆生ノ身具スル仏性也。其仏性者法身ノ妙理也。修徳ノ法身ハ白狐王ナリ。以テ智恵ノ舌ヲ舐ル無明ノ血ヲ尽シテ、真如ノ理体、自性清淨覺悟ノ蓮花ト顯ス。其中台ノ八葉ニ端座給フ。大日八葉ノ印、九尊即チ是自性法身ト云也ト者ハ此義也。故ニ一切衆生ノ身中ニ、有大日八印。

『大日經疏』で死者の「心」を食すとされる吒枳尼天は、胎藏曼荼羅の最外院に人間の手足を持つ夜叉の姿で描かれている。傍線部(A)に見える「右拳で腰を押し、左掌を仰向けて舐める様子」という印相も、血を舐める所作をあらわしたものと理解された。

右の引用では、胎藏界の真理である「理」はすべての衆生が身に具える仏性だという。そして傍線部(B)で、修徳の法身である白狐王(吒枳尼天)が、智恵の舌で「無明ノ血(煩惱)」を舐め尽くすと、その中から本来の清らかな蓮華(悟り)があらわれるというのである。六ヶ月前に人の死を知つて「心」を食べるという吒枳尼天の行為が、ここでは人々に悟りを得させるための方便として解釈されているわけである。吒枳尼天の腹中に入るといことは、本書では以下のように意味づけられた。

奪一切衆生精氣ト者、奪取テ无明妄想精氣ヲ、食入スル如来蔵ノ腹中ニ也。妙覺海也。胎藏ヲ云花蔵海ト、金剛ヲ云蜜蔵海ト也。吒枳尼王ノ腹中ニ湛満テ、卽智水ヲ、令一切衆生ヲ即身成仏セシ、無レトセル過ハ吒枳尼王。

奪一切衆生精氣の腹中は如来蔵の妙覺海であり、吒枳尼天の腹中には智水が湛えられている。それは、一切衆生を即身成仏させるものなのである。

こうした考え方は、『辰菩薩口伝』と一結の『上口決』でも共有された。『上口決』では、吒枳尼天が北辰（ここでは北斗七星）となつて衆生に命根を施すことや、寿福を与えることを説いた後に、吒枳尼天と同体と見なされる羅刹女について、次のように述べている。

況又奪一切衆生精気女者、此尊ノ異名也。或奪衆生ノ魂塊ヲ、或住ニ死陀林ニ食ニ死人ノ骨肉ヲ。生スル時ハ与ヘ寿福ヲ、死スル時ハ還テ食ス。（中略）深秘ノ伝ニ云ク、只是舐テ衆生ノ無明ノ魂塊ヲ顯シ法性心蓮ヲ、食シテ無始生死ノ骨肉ヲ、令ニ証ニ涅槃ノ妙理ヲ振舞也リ。

「奪一切衆生精気羅刹女」は、吒枳尼天の異名である。衆生が生きている時には寿福を与え、死して後はその身体を食す。ただ衆生の魂塊を舐めて法性心蓮をあらわし、骨肉を食べて涅槃の妙理を証すのだという。

このように『辰菩薩口伝』と『上口決』には、円密の教理を内包する「八葉蓮華」心臓」と、それを舐め、骨肉を食す吒枳尼天という、衆生の身体をともしたイメージが存在している。そしてこうした吒枳尼天の行為は、一切衆生を即身成仏させるための深秘として伝えられているのである。

### 三、並座する二仏と五大法性の宝塔

『辰菩薩口伝』において、十如是を配した八葉蓮華は「法全閣梨図」<sup>13</sup>と称される図像として描かれた（図2参照）。この図では「報」と記された蓮華の中央に、「大日台／多宝」「大日金／釈迦」とあるのが見える。これは胎藏界の大日である多宝如来と、金剛界の大日である釈迦如来を意味し、二仏が中台に並座する構図は「法華經法」という密教修法で用いられる「法華曼荼羅」を想起させる。

法華曼荼羅は『法華經』の宝塔品を密教的に解釈したもので、不空訳『成就妙法蓮華經王瑜伽觀智儀軌』（『觀智儀軌』）などを所依



図2



とする。法華經法は、息災・増益・延命・滅罪のための修法であり、とくに台密で重んじられた。

『辰菩薩口伝』の「法全闡梨図」を取り上げるにあたり、まずは『法華經』宝塔品の内容を確認しておきたい。

釈迦如来が『法華經』を説いたとき、地中から七宝の塔が忽然と現れて空中に留まり、釈迦如来と『法華經』を讃える声が響いた。釈迦如来は宝塔が現れた由来を、次のように語った。

「宝塔の中には如来の全身（一塊の如来の身体）が安置されていて、その仏の名を多宝という。多宝は東方宝淨世界の仏である。在世からの誓願によつて、滅後は塔中に座したまま『法華經』の説かれるところに現れて、教えが真実であることを証明するのである」と。それから釈迦如来は空中の宝塔に入り、多宝如来と並んで座した。

この内容に基づき、法華曼荼羅には中台八葉の中心に釈迦・多宝如来が並座する宝塔が描かれている。二仏は『辰菩薩口伝』にもあるように、それぞれ胎金の大日と考えられた<sup>14</sup>。

ただし、『辰菩薩口伝』の「法全闡梨図」は、『観智儀軌』などに基づく通常の法華曼荼羅とは異なるものである。それは十如是が配当されていることや、諸尊が一致しないことなどからも明らかであろう。水上文義氏によると、『講演法華儀』など仮託書の曼荼羅は、

「円教と密教をいかに合理的に整合させるかという円密一致論が目的ではなく、全く密教の立場から『法華經』をどのように曼荼羅の上に展開するか」を主眼とするものだ<sup>(15)</sup>という。「法全闡梨図」も、これと同様の発想に立脚するものだと考えられよう。

この『辰菩薩口伝』と同様に、宝塔品を念頭におきながら、『法華經』と吒枳尼天との融合を説くのが『上口決』である。『上口決』では、吒枳尼天の行為が涅槃の妙理をあらわすという「深秘ノ伝」に加え、さらなる深秘が宝塔品にあらわれているとして、以下の説を展開する。

重タル深秘ニ云ク、辰狐食肉、食已<sup>テハ</sup>以<sup>テ</sup>食<sup>ヲ</sup>為<sup>ス</sup>内証法身自受法樂<sup>ス</sup>云々。此深秘ハ頭ハレ宝塔品<sup>ニ</sup>了<sup>ス</sup>。謂ク、多宝ハ是レ一切衆生ノ過去遠々ノ死骸、尺迦如来ハ無始広劫ノ辰狐王如来也。不<sup>レ</sup>動食骨<sup>ヲ</sup>。全<sup>ク</sup>是<sup>レ</sup>一乗ノ深秘、即身成仏ノ至極也。能所不二<sup>ナリ</sup>。故住ス一塔<sup>ニ</sup>。

傍線部で、多宝如来は吒枳尼天に食される一切衆生の「死骸」であり、釈迦如来は無始広劫の「辰狐王如来」だという。食べられる死骸と、食べる辰狐王如来は能所不二（能動と受動は一体だということ）の関係にあるから、共に一塔に住むのだと、ここでは解釈している。

また点線部によれば、吒枳尼天は衆生の肉を食べて腹中に取り込

み、それを内証法身として自受法樂するという。つまり、食べるものと食べられるものが一体化するわけである。本来、宝塔品には説かれなかった「食べる／食べられる」という能と所の関係性を、ここでは吒呾尼天を介在させることによって新たに構築し、さらなる「深秘」を作り上げているのであった。

さらに『上口決』は、以下のように続ける。

々（引用者注「塔」者ハ万徳円満ノ体、死骨モ五大所成、野狐ノ身モ又タ五大所成也。死生俱ニ五大也。故ニ住ニ五大法性ノ塔ニ。既ニ能住・所住分明也。色心互依ノ如ニ白日ニ、六大法性宛然也。即身成仏不可疑之ヲ。一乗至極在之ニ。

二仏が坐す塔は、あらゆる徳を欠けることなく具えた万徳円満の姿をあらわしている。死骨も野狐も、世界を構成する五大（地・水・火・風・空）から成り、死（死骸）と生（野狐）はどちらも五大を具えているので、「五大法性ノ塔」に住むのだと説明している。

ここまでの『上口決』の言説を整理すると、

（食べる） 辰狐王如来——能——野狐——釈迦如来  
（食べられる） 一切衆生死骸——所——死骨——多宝如来

という両者の関係性が浮かび上がる。どちらも五大で形成されている

て、分ち難い能所不二の関係にあるから、塔内に並座するという論理である。

ここで登場する「五大法性ノ塔」は、地・水・火・風・空の五大を表示する五輪塔がイメージされよう。留意したいのが、衆生の身体もまた、密教では五輪に配当されるということである。

『法華經』の宝塔を五大法性の塔とする説は、たとえば山門黒谷流の光宗（一二七六～一三五〇）が編纂した『溪風拾葉集』巻二十七「法華法」に見ることができる。『溪風拾葉集』は宝塔品を「五大法性常住ノ宝塔ナル事」を説くものとし、宝塔と五大、そして身体との関係を次のように記す。

一。宝塔品事 第十一 此品者、五大法性常住ノ宝塔ナル事ヲ説也。又云、多宝仏ト者、平等大会ノ大智常住ノ顕也。（中略）今宝塔者、是毘盧遮那身土相称之相貌カ故也云云。五大法性五字真言事ヲ云々云云。釈曰、腰下ハ五字本不生、金色方形、仏身地。臍輪ハ五字離言説、白色円形、大悲水。心上ハ五字無染著、赤色三角、大智火。額上ハ五字離因業、黒色半月、大風輪。頂上五字等虚空、雑色団形、大空輪。即是無作真言也云云。（『大正藏』七六、五八九頁b）

五大は五字真言と、身体の各部位に配当される。これは『大日經』や『大日經疏』などで示される五輪成身觀、五字嚴身觀と呼ば

れる観法の思想で、密教行者の身体に五字を配して莊嚴し、大日如来や修法の本尊と一体化するものである。塔はまた、大日如来の三昧耶形でもあった。<sup>(16)</sup>『上口決』の塔をめぐる叙述は、こうした仏と衆生の身体に対する解釈が根幹にあると考えられよう。

かくして身体にも見立てられる五大法性の宝塔は、さらにイメーヂを肥大させて、龍猛菩薩に密教が伝えられたという南天の鉄塔とも結びついた。『上口決』では、釈迦仏・多宝仏が坐す塔について、以下のように述べる。

況又不動此塔。全々南天ノ鉄塔也。若爾者、鉄塔流伝ノ兩部ハ、即チ本迹二門ノ深秘。教粒ノ仏骨ハ一切衆生ノ生々世々ノ遺骨、多宝世尊ノ全体ナリ。大日者、過去遠々辰狐王、尺迦如来是也。住蜜塔中者即チ是也。

二仏が並座する『法華經』宝塔品の塔は、南天の鉄塔と同じものである。ゆえに、鉄塔で伝授された胎金兩部の法門は、『法華經』の本迹二門の深秘なのである。教粒の仏骨は、一切衆生の生々世々の遺骨であり、多宝如来の全体である。大日如来は、過去遠々の辰狐王であり、釈迦如来がこれであるのだ、という。ここで本文が宝塔品の「如来全身」という経文に倣って、多宝如来の「全体」と記している点に注意したい。これについては後述する。

このように、本書は『法華經』の宝塔と、南天の鉄塔とを一致さ

せることで、「兩部＝本迹」「大日如来＝辰狐王（吒枳尼天）＝釈迦如来」という論理を展開し、重ねて円教と密教の融合を説く。台密では大日如来と久遠の釈迦を同体とするが、ここでは更に吒枳尼天を介させている点に独自性があるといえよう。

#### 四、毘沙門天の宝塔と身心

ところで、吒枳尼天は四天王のひとり、北方の守護者である毘沙門天（多聞天）と同体だとされる。両者の同体関係は、すでに保延五年（一一三九）の書写奥書を持つ、仁和寺藏『多聞吒枳尼經』に見ることができる。<sup>(17)</sup>また『辰菩薩口伝』とおなじく秀範写の称名寺聖教『乙足神供祭文』にも、「本尊ハ文殊ノ垂迹ナリ。為三利益三衆生、或ハ現シテ辰狐ト、人ニ与ヘ愛敬ヲ、或ニ示シテ多門ト、人ニ授ケ福德ヲ」と、両者が一体の関係にあることが示されている。『辰菩薩口伝』『上口決』の五大法性の宝塔と、身体との合一化を考えると、この毘沙門天をめぐる言説が手がかりとなる。

『辰菩薩口伝』にも、毘沙門天を連想させる以下のような叙述が見える。

私云、吒枳尼王如意珠王菩薩者、塔中ノ大日所覚悟給。本覺ノ中ノ智法身如来ノ示現也。故ニ在テ生死ノ軍中ニ、着テ中道ノ甲冑ヲ、降伏ス四魔邪敵ヲ。入テ蜜塔ノ中ニ、持テ中道ノ善力ヲ、遮ニ怨ノ中



道ノ將軍王也。故ニ、此甲冑ノ印明ヲハ用四魔降伏也。此ノ意ヲ云、大日化シテ作降伏四魔將軍ト也。深秘々々最秘々々尚々可聞口決<sup>一</sup>。

「吒呾尼王如意珠王菩薩」は塔中の大日であり、中道の甲冑を着て四魔邪敵を降伏する。密塔に入り、中道の善力をもつて、二怨を遮る中道の將軍王である。この部分の描写は、『溪嵐拾葉集』第三十六「多聞天悉決事」の毘沙門天の様子とも重なる。

又一義云、毘沙門<sup>ニタリ</sup>二者如レ点談也。所レ謂為除<sup>ニ</sup>四魔軍ヲ。雖<sup>レ</sup>著<sup>ニ</sup>金剛甲冑ヲ、為<sup>ニ</sup>正法護持ト。(中略)示云、多聞者降魔大將施福ノ本尊也。左手ニ宝塔ヲ持事ハ、正法護持ノ表相也。右手ニ三古鉢ヲ取事者、降魔ノ表示也。是以四魔三障ノ難ヲ除テ、三身円満ノ恵命ヲ得也。故ニ身ニ著<sup>ニ</sup>金剛甲冑、壽命長遠徳ヲ令レ得也。仍所持三摩耶悉是福智円満表示也<sup>云々</sup>。(『大正藏』七六、六二九頁a)

毘沙門天は金剛の甲冑に身を包み、左手には宝塔を、右手には三古鉢を携えて、四魔三障の難を除き、壽命長遠の徳を与える。邪敵を払う將軍であると同時に、福德を与える福神でもあるのだ。

ここで注目したいのが、毘沙門天が左手に捧げ持つ宝塔である。これは「此尊所持ノ宝塔ハ法花塔婆也」(『大正藏』七六、六二九頁

b)と記されるなど、『法華經』の塔婆とも見なされた。この宝塔をめぐる中世の口決類に、『辰菩薩口伝』や『上口決』の塔が象徴するものが端的に語られている。

紀州根来寺の頼瑜(一二二六〜一三〇四)の『薄草子口決』巻二十「毘沙門天」では、宝塔が毘沙門天自身の身体となり、つぎつぎとイメージが拡大していく様子を見ることができるといえる。

又尋云、或又以手押腰如何。答。御口云、此形像為<sup>ニ</sup>当尊秘事<sup>一</sup>。其身即五輪塔。五輪成身深義五大嚴身奥旨可思<sup>レ</sup>之。故知又持<sup>レ</sup>塔義也。私助云、彼尊身即塔婆心是舍利也。身中有<sup>レ</sup>心故、塔中安<sup>ニ</sup>舍利。(中略)又一義云、菩提心体即五輪塔又鉄塔也。即舍利也。宝珠也。故大疏第六云、復次梵音制底与<sup>ニ</sup>質多<sup>一</sup>同体。此中秘密謂<sup>レ</sup>心為<sup>ニ</sup>仏塔<sup>一</sup>也<sup>文</sup>。(『大正藏』七九、二九五頁c) 二九六頁a)

口伝によると、毘沙門天の腰に手を押し当てた姿は、当尊の秘事である。その身はすなわち五輪塔であり、故に塔を持つのである。

その身は塔婆心であり、これは舍利のことである。毘沙門天の身中に「心」(＝舍利)があるので、捧げ持つ塔のなかにもおなじように舍利が安置されているのだ、と述べている。また別の説によれば、菩提心体はすなわち五輪塔であり、南天の鉄塔であり、舍利であり、如意宝珠である<sup>(18)</sup>。ゆえに『大日經疏』には、「梵音で制底<sup>せいてい</sup>(塔)と

質多<sup>しちた</sup>（心）はおなじ字体である。その秘密として、心を仏塔とした<sup>(19)</sup>とあるのだ、という。

ここで登場する如意宝珠は、いうまでもなく舍利と習合するものであり、中世密教の中核を担う重要なものである。また先に掲げた『辰菩薩口伝』で「吒枳尼王如意珠王菩薩」と呼称されていたことからわかるように、宝珠は吒枳尼天とも習合していた<sup>(20)</sup>。『辰菩薩口伝』の内題は、「如意宝珠王菩薩口決」である。本文中でも「当尊<sup>（尊）</sup>は只是<sup>（是）</sup>宝珠<sup>（珠）</sup>」と示されるなど、両者の一体化は強く意識されている。

このように毘沙門天をめぐる言説からは、塔が含有する多彩な意味を知ることができる。『辰菩薩口伝』『上口決』の背後にも、同様の思想が横たわっていると考えられよう。毘沙門天の身体と塔をめぐる秘説は、そのまま衆生の身体へと投影される。

さらに、天台僧の澄豪（一二五九〜一三五〇）が撰述した『総持抄』の「法華法事」には、塔と心臓について、次のような説が掲げられている。

問。実<sup>（実）</sup>塔者何物耶。示云。一切衆生身心也。身者干栗駄。是蓮華即所住也。心者質多。是月輪即能住也。月輪者行者心月輪也。（『大正藏』七七、八五頁a）

『法華経』の塔は、本当は何であるのか、という問いに対し、一

切衆生の身心だと答える。そのなかでも「身」は干栗駄<sup>（干栗駄）</sup>（心臓／胎蔵界）であり、これは蓮華で、所住である。また「心」は質多（慮知心／金剛界）であり、これは月輪で、能住であるという。

以上の言説群をまとめると、『辰菩薩口伝』『上口決』で語られている『法華経』の宝塔は、中世密教の秘事口伝の文脈において、悟りを内包する八分肉団（蓮華）、五大を具える衆生の身体、そして舍利と往還可能な如意宝珠、という性質を有している。諸解釈を取り入れることで言説が拡がり、イメージの連環でつぎつぎと展開していく有様は、口伝という形式による中世的な秘説形成の営みを体现したものだといえよう。

『辰菩薩口伝』『上口決』の多義的な解釈には、即身成仏を掲げる密教的な身体観と、円密一致への志向性が強く作用している。両書において大日如来の化身とされる吒枳尼天は、釈迦如来となつて多宝如来とともに塔中に座す。この塔は『法華経』の宝塔であり、密教が相承された南天の鉄塔であり、吒枳尼天が食む心臓蓮華でもあった。こうして吒枳尼天を仲立ちにした『法華経』と密教の融合が成し遂げられ、吒枳尼天は「真言法花ノ惣体」としての地位を確立するのである。

## 五、吒枳尼天と即位灌頂

『辰菩薩口伝』と『上口決』で展開された、塔・蓮華・舍利、そ

して身体をめぐる重層的な言説とイメージは、即位灌頂の口決とも結びついていった。

即位灌頂は、天皇が即位式で摂関家より伝授された印明を実修する儀礼であり、吒枳尼天の印明が用いられたことが知られている<sup>(21)</sup>。阿部泰郎氏は即位灌頂について、「天皇が『王』になることを身・口・意の三業において実践する所作であり、『王の身体』を自ら仏としてテキスト化する行為」と評した<sup>(22)</sup>。

『辰菩薩口伝』は巻末で、即位灌頂に関して次のように述べている。

入<sub>レ</sub>当尊三摩地<sub>ニ</sub>、即<sub>チ</sub>真言法花ノ肝心ナリ。即位灌頂独<sub>リ</sub>在三井者、即<sub>チ</sub>是等ノ大事也。可秘々々。

『辰菩薩口伝』では、即位灌頂は三井寺に唯一伝わるものであり、それは吒枳尼天が真言法華の肝心だという大事に由来するという。本書にはこれ以外に、即位灌頂に関する具体的な記述は認められない。しかし、おなじく称名寺聖教の『輪王灌頂口決<sub>私</sub>』に、『辰菩薩口伝』『上口決』と通底する言説を見ることができる。

『輪王灌頂口決<sub>私</sub>』は、称名寺二世釵阿が晩年に書写したもので、即位灌頂で用いられる印明や秘説を記した口伝書である。本書の末に「隆弁伝」と見えることから、鎌倉中期に鶴岡別当として幕府に仕え、三井寺長吏となった隆弁僧正の所説であり、寺門派の伝えた

即位法の口決だと推測されている<sup>(23)</sup>。

即位灌頂には、大きく分けて『法華經』四要品（方便品・安樂行品・寿命品・観音品）の授受を主眼とする天台方即位法と、四海領掌印を結び真言を唱える東寺方即位法があるが、本書はその両方の要素を兼ね具える。

外題の輪王とは、転輪聖王のことである。なかでも須弥山世界の四大洲を統治する最勝の王を、金輪聖王、あるいは頂輪王と呼ぶ。輪王灌頂は天皇を金輪聖王に擬して行なわれるものであり、『輪王灌頂口決<sub>私</sub>』にも「住<sub>ニ</sub>スルヲ金<sub>〇</sub>ノ位<sub>ニ</sub>名<sub>ニ</sub>輪王水<sub>丁</sub>ト。故<sub>ニ</sub>御即位<sub>ノ</sub>後<sub>ハ</sub>奉<sub>ニ</sub>呼<sub>フ</sub>金輪聖王ト。当尊即<sub>チ</sub>金<sub>〇</sub>ノ々々即<sub>チ</sub>当尊也」と、金輪の位に住することを輪王灌頂ということ、即位後は金輪聖王と称すること、当尊（吒枳尼天）はすなわち金輪であり、金輪はすなわち当尊だということが語られている。

『輪王灌頂口決<sub>私</sub>』で注目したいのが、灌頂で用いられる『法華經』四要品への言及部分である。

#### 十▲次四要品

口云、法花<sub>ト</sub>金輪<sub>ト</sub>ハ、人<sub>ト</sub>法<sub>ト</sub>ノ扱婦肝<sub>ノ</sub>心<sub>ハ</sub>、俱<sub>ニ</sub>当尊<sub>ノ</sub>三摩地也<sub>リ</sub>。  
（中略）諸教ノ婦法花<sub>ノ</sub>二十八品<sub>ニ</sub>、々々々々ハ婦四要<sub>ニ</sub>、々々ノ肝心<sub>ハ</sub>即<sub>チ</sub>輪王頂上ノ玉也<sub>リ</sub>。金<sub>〇</sub>ノ法花<sub>ハ</sub>俱<sub>ニ</sub>以全身ノ舍利<sub>ヲ</sub>為<sub>ス</sub>体<sub>ト</sub>。

法華と金輪はともに当尊（吒枳尼天）の三摩地である<sup>(24)</sup>。諸教は

『法華經』の二十八品に帰し、二十八品は四要品に帰す。四要の肝心は「輪王頂上ノ玉」である。金輪も法華も「全身ノ舍利」をもつて体となすのだ、という<sup>(25)</sup>。

この全身の舍利は、本稿の第三節・第四節で多宝如來の「全体」(『上口決』)として登場したものであり、釈迦如來の遺骨のように分割した碎身舍利に対して、多宝如來のように全身で一塊となつてゐる舍利のことを指す。これは仏の大慧の譬喩であるとともに、『法華經』自体をも意味した<sup>(26)</sup>。たとえば『溪嵐拾葉集』卷十一では「法花者、全身舍利。諸經者、碎身舍利也」と、『法華經』を全身舍利、それ以外の諸經を碎身舍利としているのが確認できる。さらに『輪王灌頂口決』<sup>私</sup>は、次のように続ける。

全身舍利ト者、惣別俱ニ所ノ歸ニ根本惣持ノ円塔ナリ。入<sup>カラ</sup>此円塔ニ、名<sup>ク</sup>一字頂○王ノ灌頂ト。此ト所入ノ円塔者ハ、即チ心塔也<sup>リ</sup>。心塔者ハ即チ独一法界<sup>一</sup>。本有金剛ノ智珠也<sup>リ</sup>。本尊ノ所ノ頂戴<sup>一玉フ</sup>、一果ノ宝珠ト者、即是<sup>レ</sup>也<sup>リ</sup>。

全身舍利は、根本惣持の円塔である。この円塔に入ること一字頂輪王の灌頂と呼ぶ。円塔は「心塔」(衆生の心を大日如來法性の塔婆と見なす語)であり、心塔はすなわち独一法界、本有金剛の智珠である。本尊がいたたく宝珠は、このことである、という<sup>(27)</sup>。

塔・舍利・『法華經』が往還し一体化する構図は、前節までに見

てきた『辰菩薩口伝』『上口決』と共通している。『輪王灌頂口決』<sup>私</sup>の灌頂が四要品の授受を主眼とすることを考えれば、こうした教理が用いられることも理解できよう。ここではそこへ天皇の身体という要素が加わるのである。

それから本書は、次のように述べる。

彼ノ円白ノ心塔者ハ、今ノ八葉方寸ノ心蓮也<sup>リ</sup>。此心蓮ヲ名<sup>ニ</sup>妙法蓮花ト。此心蓮者、又彼根本ノ円塔也<sup>リ</sup>。(中略)故ニ野虎<sup>ハ</sup>衆生精氣ヲスフト者申<sup>ハ</sup>、彼ノ八葉ノ心蓮ヲスフ也。スフ意ハ生死無明ノ障ヲスイホシテ、可<sup>レ</sup>令<sup>ニ</sup>本付法性心蓮ノ根本<sup>ハ</sup>行相也<sup>リ</sup>。故ニ十羅刹ノ奪精氣ハ即チ今ノ辰虎王菩薩也。十如是ノ中ニハ本末究竟ノ如是也。法花ノ体ハ十如是ナリ。々々々々ノ惣体ハ、第十ノ究竟如是也。故知ヌ、当尊ハ顕密ノ根源、両部ニ本迹ノ能生ノ元本也<sup>リ</sup>。元本者、只是<sup>レ</sup>心塔一果ノ宝珠也<sup>リ</sup>。深秘々々。

傍線部で、「心塔」八葉方寸の心蓮「妙法蓮華」だと明言している。続いて波線部で、八葉の心蓮を吸う十羅刹女は「辰虎王菩薩」であり、十如是のなかの「本末究竟」だという。十如是の惣体である「究竟」に位置づけられる吒枳尼天は、「顕密ノ根源」「両部本迹ノ能生」として、顕密と両部とを兼ね具えた存在であり、その「元本」は、「心塔一果ノ宝珠」にある、と結んでいるのであった。これらはまさに『辰菩薩口伝』『上口決』において、智証大師や安然

の口決として繰り返されてきた教説と一致するものである。

即位灌頂は、「即位する天皇の密教的な身体の解釈をつうじて、中世的な天皇像を成立させていく」ための儀礼とされる。<sup>(28)</sup>『輪王灌頂口決<sub>私</sub>』では、『法華經』と同一化した円塔に入ることこそが輪王灌頂だと述べていた。三井寺に伝わったというこの即位灌頂の口決は、天皇の身体と『法華經』、そして大日如来との一体化を目的としている。それは心連を食むことで即身成仏させるという、衆生の身体そのものと結びつく「深秘」の存在である吒枳尼天によってこそ成就されるものだったといえよう。

## おわりに

以上のように、『辰菩薩口伝』と『上口決』の吒枳尼天をめぐる言説は、即身に成仏するという密教的身体観を基調として、八葉蓮華、塔、舍利、如意宝珠といった多彩なキーワードを媒介に、『法華經』と密教との一致を説いていた。こうした言説は、天台の仮託書や日本撰述經典などに近接するものであったが、『辰菩薩口伝』と『上口決』においては、それは衆生の「心」を食す吒枳尼天によって成就されるものであった。

かかる教理は、『輪王灌頂口決<sub>私</sub>』のような即位灌頂にも取り入れられた。衆生の身体を食んで即身成仏させる吒枳尼天は、天皇の身体を仏と一体化する即位儀礼に結びつきやすかったものと推測さ

れる。心蓮華という身中の曼荼羅と直結するがゆえに、吒枳尼天は力を持ち得たのである。

さまざまな口決・解釈を撰取することで新たな秘説が生み出され、イメージの連鎖によってつぎつぎと世界が展開していく様相は、ともすれば混沌とし、煩雑であるが、一方でそれは中世的な秘説の形成過程を如実にあらわしているともいえる。このように吒枳尼天をめぐる言説は『法華經』と結合しながら、中世儀礼の一端を支えていたのである。

## 註

- (1) 吒枳尼法と即位灌頂に関する論考は、阿部泰郎「宝珠と王権——中世王権と密教儀礼」(『岩波講座東洋思想16 日本思想2』岩波書店、一九八九年)、同「灌頂儀礼と宗教テクスト」(『中世日本の宗教テクスト体系』名古屋大学出版会、二〇一三年)、山本ひろ子「異類と双身——中世王権をめぐる性のメタファー」(『変成譜』春秋社、二〇〇〇年)、松本郁代「中世王権と即位灌頂——聖教のなかの歴史叙述」(森話社、二〇〇五年)、同「天皇の即位儀礼と神仏」(吉川弘文館、二〇一七年)、西岡芳文「ダキニ法の成立と展開」(『朱』五七、伏見稲荷大社、二〇一四年二月)など参照。

- (2) 柳田良洪「神道思想の受容」(『真言密教成立過程の研究』山喜房仏書林、一九六四年)、金沢文庫展示図録『陰陽道×密教』(神奈川県立金沢文庫、二〇〇七年)、西岡芳文「金沢称名寺における頓成悉地法——企画展「陰陽道×密教」補遺」(『金沢文庫研究』三二〇、神奈川県立金沢文庫、二〇〇八年三月)。



- (3) 拙稿「称名寺聖教『辰菩薩口伝』について——中世ダキニ天信仰の「側面」」(『北海学園大学人文論集』六六、北海学園大学文学部、二〇一九年三月)。
- (4) 秀範は大和室生寺や東山白毫寺での活動がうかがえる学僧で、称名寺二世鈿阿(一二六一—一三三八)に傾成悉法や神祇灌頂を伝授した人物とされる。称名寺の吒枳尼天関連資料は、外題を鈿阿が記し、本文を秀範が書写したものが多し。
- (5) 「方便品、諸仏智慧、甚深无量」云二句八字へ、宣无所不至印<sup>ヲ</sup>。中台大日如来<sup>ナリ</sup>。(中略)是円仏方便<sup>シテ</sup>、化作<sup>マシ</sup>藍婆羅刹女<sup>ノ身</sup>。從<sup>リ</sup>其智慧門<sup>ニ</sup>云、至于人記品ノ終<sup>ニ</sup>、宣<sup>フ</sup>大威徳生印<sup>ヲ</sup>。宝幢如来<sup>ナリ</sup>。(中略)其最後吒枳尼天方便<sup>シテ</sup>、示現奪一切衆生精氣羅刹女ノ身<sup>ト</sup>也。是十羅刹女八葉九尊<sup>ハ</sup>、及吒枳尼尊、示現色身也<sup>ト</sup>。「私云、此八葉九尊、即大日如来ノ化現也。最後ノ化身、吒枳尼天是也。此吒枳尼天之示現、十名奪一切衆生精氣羅刹女身也」(『辰菩薩口伝』)。なお、『辰菩薩口伝』の八葉は胎藏界と金剛界に関する記述が混在し、胎金の一体も象徴している。
- (6) 水上文義氏は円密一致思想を反映した『講演法華儀』『法華曼荼羅諸品配釈』などの曼荼羅について、「日本天台で独自に考えられた『曼荼羅』であり、主に中世日本天台の偽疑書に記されるもの」と指摘している。それらは「たいがい胎藏曼荼羅の上に直接『法華經』品々を投影しようとするもの」であり、それゆえに図像になり得ないが、「それが日本撰述偽疑書に見る『法華經曼荼羅』の大きな特徴」だという。水上文義「法華曼荼羅と円密一致思想の『曼荼羅』」(『台密思想形成の研究』春秋社、二〇〇八年)。なお、『講演法華儀』は十二世紀中ごろまでには成立していたと見られるという。同氏「安然以前に『蓮華三昧經』を「引用」した文献の検討」(『台密思想形成の研究』)。
- (7) 吒枳尼天と十羅刹女を八葉に配した説は、良助親王(一二六八—一三一八)仮託の『法華輝臨遊風談』巻七「十羅刹本地事」にも認められる。「法花秘法ノ之藍婆ハ妙法蓮花ノ八葉中台東葉ノ阿闍尼<sup>ナリ</sup>。毘藍婆ハ南葉ノ宝勝<sup>ニ</sup>ナリ。曲齒ハ西葉ノ阿弥陀<sup>ニ</sup>ナリ。花齒ハ北方ノ空成就<sup>ト</sup>也。余ハ四隅ノ普賢文殊觀音弥勒也。又中台ハ大日如来<sup>ナリ</sup>。第十奪一切衆生ハ茶枳尼<sup>ナリ</sup>。法花經ノ字寶神也。已上」(『大日本仏教全書』一四、四七七頁)。
- (8) 本稿で引用する称名寺聖教の本文と図1・2は、『陰陽道×密教』(前掲注2)および金沢文庫所蔵の影印による。適宜、句読点や傍線等を付した。
- (9) 『大日經疏』卷十「次茶吉尼真言。此是世間有造此法術者、亦自在呪術。能知人欲命終者、六月即知之。知已即作法。取其心食之。所以爾者、人身中有黃。所謂人黃猶牛有黃也。若得食者、能得極大成就」(『大正藏』三九、六八七頁b)。
- (10) 『菩提心義抄』第一(『大正藏』七五、四五四頁b)。中世の例では、澄豪の『總持抄』卷七「法華法事」に、「示云、妙法蓮華者、衆生心身也。妙法者心也。蓮華者身也。撰「法界」為「一心」。法界即識大也。撰「五大」為「八分肉団」。肉団即八葉蓮華也。此蓮華ト云也」(『大正藏』七七、八六頁a)などに見える。
- (11) 「其八分肉団、即自性清淨覺悟ノ蓮花也。其葉々ニ无量无边ノ数アリ。根本ハ八葉也。東葉<sup>ヲ</sup>ハ名相葉<sup>ト</sup>。南葉<sup>ヲ</sup>ハ名性葉<sup>ト</sup>。(中略)中台<sup>ヲ</sup>ハ名報台<sup>ト</sup>。始ノ相葉<sup>ヲ</sup>為本、後ノ報台<sup>ヲ</sup>為末。九尊如来、化中道実相<sup>ト</sup>也。故云究竟<sup>ト</sup>也。(中略)四仏四菩薩、端座八葉ノ上<sup>ニ</sup>、大日如来ハ結跏趺坐中台<sup>ニ</sup>給<sup>フ</sup>。其ノ无量无边花葉ノ上<sup>ニ</sup>、仏菩薩・明王等端座給<sup>フ</sup>」(『辰菩薩口伝』)。
- (12) たとえば安然の『胎藏界大法対受記』には、「海大徳説。茶吉尼定掌爾賀嚩呬<sup>レ</sup>之者、先申ニ定掌ニ横掩ニ面門<sup>ニ</sup>口也。出<sup>レ</sup>舌触ニ掌

- 中。如下食<sub>レ</sub>入血<sub>二</sub>之勢<sub>上</sub>。慧拳按<sub>レ</sub>腰。爾賀<sub>レ</sub>嚙者舌也」(『大正藏』七五、八六頁a)とある。
- (13) 法全は唐青龍寺の僧。入唐した円珍は法全から両部大法を受け、金剛界五部諸尊の觀法を説いた白描図像『五部心觀』を相伝している。「法全闡梨図」はそこから名付けられたものか。
- (14) 法華曼荼羅の二仏については、『總持抄』、『法華法事』に「又本尊塔中安<sub>二</sub>釈迦多宝<sub>一</sub>也。本有修生<sub>アリ</sub>。修生時、釈迦多宝為<sub>二</sub>本尊<sub>一</sub>。本有時、釈迦多宝ヲ台金兩部大日ト云也。於<sub>二</sub>法華実相中道理<sub>一</sub>、分之為<sub>二</sub>本迹二門<sub>一</sub>。本迹二門ハ、是兩部大日。(中略)以<sub>二</sub>蓮華<sub>一</sub>為<sub>二</sub>法華體<sub>一</sub>。八分肉團即八葉蓮華也」(『大正藏』七七、八四頁a)、賴瑜の『秘鈔問答』第七『法華經』に「御口決云、今法最秘伝云、釈迦多宝、如<sub>レ</sub>次金台二界大日習也」(『大正藏』七九、四〇二頁a)などと記されている。
- (15) 水上文義「安然以前に『蓮華三昧經』を「引用」した文献の検討」(前掲注6)参照。
- (16) 大日如來の三昧耶身である塔は主に二種類あり、五輪所成の塔は胎藏界の五大の徳を示す理塔、鏤字所成の塔は金剛界の知徳をあらわす修生塔であるという。
- (17) 阿部泰郎「宝珠と王権」(前掲注1)、入江多美「輪王寺藏「伊頭那(飯綱)曼荼羅図と仁和寺藏「多聞吒枳尼經」について」(『歴史と文化』一七、栃木県歴史文化研究会、二〇〇八年八月)参照。
- (18) おなじく賴瑜の『秘鈔問答』第十四本「毘沙門」でも、「御口決云、今次第全身宝塔者、此塔中安<sub>二</sub>仏舍利也云。全身舍利宝塔之義也。此舍利即如意宝珠也。薄奉塔以眼視之者、塔是南天鉄塔也」(『大正藏』七九、五三四頁a)とあり、全身舍利<sub>二</sub>宝塔<sub>一</sub>如意宝珠<sub>二</sub>南天鉄塔<sub>一</sub>という構図を見ることができ。
- (19) なお、制底(仏塔)は『大日經疏』卷五に、「制底翻為福聚。謂諸仏一切功德聚在其中。是故世人、為求福故、悉皆供養恭敬」(『大正藏』三九、六二八頁b)と見える。福聚は「福の集まり」という意味で、福神である吒枳尼天・毘沙門天に通じる。
- (20) 阿部泰郎「宝珠と王権」(前掲注1)、山本ひろ子「辰狐のイコノグラフィ」(『変成譜』前掲注1)など参照。
- (21) 即位灌頂の濫觴は後三条天皇のころと伝わるが、史料上で確認ができるのは伏見天皇が即位した正応元年(一二八八)のことである。松本郁代「中世王権と即位灌頂」(前掲注1)、同氏「仏教的世界観における天皇」(『天皇の即位儀礼と神仏』前掲注1)、阿部泰郎「宝珠と王権」(前掲注1)、山本ひろ子「辰狐のイコノグラフィ」(前掲注20)など参照。
- (22) 阿部泰郎「灌頂儀礼と宗教テクスト」(前掲注1)。
- (23) 阿部泰郎「灌頂儀礼と宗教テクスト」(前掲注1)。
- (24) 「輪王灌頂口決」の口伝冒頭に見える「法花<sub>ト</sub>金輪<sub>ト</sub>ハ、人<sub>ト</sub>法<sub>ト</sub>ノ扱掃肝<sub>ノ</sub>心、俱<sub>二</sub>當尊<sub>三</sub>三摩地也<sub>一</sub>」という一文は、『辰菩薩口伝』卷末の「入<sub>レ</sub>當尊三摩地<sub>ニ</sub>、即<sub>ニ</sub>真言法花<sub>ノ</sub>肝心<sub>ナリ</sub>」という記述と重なる。『辰菩薩口伝』と『輪王灌頂口決』は、「法花・真言」「法花・金輪」という差異こそあるものの、両書ともにそれらが吒枳尼天の三摩地であり、吒枳尼天によって同一化されるものという点ではおなじ論理を有する。
- (25) 「輪王頂上玉」は、『法華經』安樂行品に見える『法華經』の教えを輪王の髻中の明珠に喩えた譬喩を踏まえての表現だと考えられる。
- (26) 『溪風拾葉集』卷十一には、「一、法花三顆宝珠事。仰云、珠有三種。一ニハ王頂<sub>ノ</sub>珠即本門珠也。二衣珠即迹門珠也。三龍女珠也云云。本迹観心三重宝珠也。一義云、法花者全身舍利。諸經者碎身舍利也。一仏菩提者、全身舍利也。故金輪一字ト一体也」(『大正藏』七六、

五四四頁b)と見える。

(27) 一果の宝珠は、『上口伝』でも「鉄塔流伝ノ大日誓中ノ珠」と言及されているので、『輪王灌頂口伝』と『上口決』が塔と宝珠をめづつて共通の認識を有していたことが類推される。

(28) 松本郁代「公の秘説」としての即位灌頂」（『天皇の即位儀礼と神仏』前掲注一）。

〔付記〕本研究は、JSPS 科研費 JP20H100675 の助成を受けたものです。

## ENGLISH SUMMARY

### Study on Dakini and the “*Lotus Sutra*”: Using the secret book on Dakini of the Shōmyōji temple as a clue

ARIGA Natsuki

In this study, the secret book on Dakini (吒呌尼) handed down to Shōmyōji temple (称名寺) is deciphered, and the relationship between medieval rituals and logic discussed. “*Shinbosatsu-kuden* (辰菩薩口伝)” and “*Shinbosatsu-kuden-jōkuketsu* (辰菩薩口伝上口決)” are books from the Kamakura period which collect the mysteries of Buddhist Yasha, Dakini. These two books are based on the idea of Sokushin-jōbutsu (即身成仏). Furthermore, the keywords of lotus, stupa, bones of Buddha, and cintamani are used to explain the agreement between “*Lotus Sutra* (法華経)” and esoteric Buddhism from the standpoint of the Tendai sect. This was mediated and fulfilled by the nature of Dakini, which eats the human heart.

The same logic can be found in “*Rinnō-kanjō-kuketsu* (輪王灌頂口決私)”, which wrote about the secret of the emperor’s enthronement abhishheka. This secret book is also from the Kamakura period and was handed down to Shōmyōji temple. This ritual aims for the unification of the emperor’s body and the Buddha.

Through this approach, the discourses surrounding Dakini and the “*Lotus Sutra*” could logically support the medieval rituals, from Dakini’s magic to the emperor’s enthronement.

*Key Words:* Dakini, “*Lotus Sutra*”, Shōmyōji-shōgyō, “*Shinbosatsu-kuden*”, emperor’s enthronement abhishheka